

じやりみち

…被災地支援情報…

第120号 発行日 2020. 4.20
被災地 NGO 協働センター
〒652-0801 神戸市兵庫区中道通2-1-10
TEL:078-574-0701 FAX:078-574-0702
HP:<http://ngo-kyodo.org/>
Facebook:<https://www.facebook.com/KOBE1.17NGO>
E-mail:info@ngo-kyodo.org
口座番号:01180-6-68556(郵便振替)

2011年3月11日 東日本大震災から10年…

特集：東日本大震災支援活動



被災地 NGO 協働センタースタッフ 増島智子

東日本大震災から10年を迎えました。2011年3月11日午後2時46分に宮城県沖を震源としたマグニチュード9.0、最大震度7の大地震が発生しました。被災地域は、北は北海道から南は関東まで広範囲に及びました。それ以上に世界を震撼させた福島第一原発の過酷事故は、原発の安全神話を崩壊させ、私たちの暮らしを一変させました。

亡くなられた方は、15,899名、行方不明者は2,526名(警察庁調べ2021年3月現在)になりました。亡くなられた方には心からご冥福をお祈りするとともに、行方不明の方が一日にでも早く見つかりますように願ってやみません。



▲大槌町役場の様子

東日本大震災の被災地へ

私をはじめ、東日本大震災の被災地に行ったのは震災から2週間後の岩手県でした。遠野市に拠点をおき、約1年間専従スタッフとして被災地で活動しました。当センターでは遠野市社会福祉協議会と地元の青年会議所、ボランティアやNPOなどともに「遠野まごころネット」の立ち上げのお手伝いをさせて頂きました。まけないぞうと足湯の活動を中心にしながら、ボランティアセンターのサポートを行いました。

最初に訪問した岩手県大槌町は、津波による火災が飛び火し山火事に広がり、言葉を失う光景が海沿いに続き、津波の恐ろしさに目を覆うほどの状況でした。阪神・淡路大震災の時は、戦争の後の焼け野原はこんな感じだったのかなと思いました。建物が崩れていてもなんとなく震災前の光景が目に見えようような感じでした。けれども、東日本大震災の津波後の被災地では建物も何もかもが跡形もなく流れ去り、まるで原爆が落ちたかのように津波がすべてを奪い去り、津波前の姿は想像もできませんでした。そんな中でも生き残った被災者は、流されなかった重機や資器材を使い幹線道路のガレキをよけ、冷凍庫に残った食材を分け合い、生き抜こうとしていました。「みんな流されて、役割分担した人も仕事で地域にいないし、防災訓練なんて何の役にも立たなかった」と言っていた被災者の人の言葉が印象的でした。いつも最悪の事態を想定して、マニュアルに頼らず、それぞれができることをしていくことが大切なんだとあらためて実感しました。

そして、津波の2週間後にまけないぞうづくりをする



▲大槌役場の様子

ため避難所に入りました。食料や水、毛布などがまだ不足している中で、タオルと裁縫道具を持って訪問するのは正直躊躇しました。実際にボランティアの人にも「いまこんなことしている場合ではないのでは？」という指摘もありました。避難所につくと、数人の女性がいてまけないぞうづくりに参加してくれました。まけないぞう



▲ガレキと化した町



▲ガレキと化した町

を作るうちに、「2週間ぶりに針を持てたわ！いつもは家に戻ると毎日針を持っていたからね。」「ぞうさんづくりに集中してやっと津波のことを忘れることができた」「久しぶりに頭をつかって今日はよく眠れるわ！」などの言葉をたくさん頂きました。

このような被災者の言葉を聞いて、「まけないぞうは被災者に必要とされているんだ」と確信を持ち、その日から大槌町、釜石市、大船渡市、陸前高田市ひたすら避難所を回りました。

津波の後、被災地では流された家がほとんどなので、被災者の人も家を片付けるという行為があまりなく、避難所で何もできずにボーっとしている時間が多いということでした。被災者の人は、悶々と津波の事、これからのことをどうすればいいのか考えているだけだったのです。そんな中、「まけないぞう」を夢中で作っていて、何も考えずにいることで、一瞬でも津波のことを忘れることができたようです。

まけないぞうの活動は、遠野市でモノづくりの活動を



▲避難所でのまけないぞうづくり

している「ふきのとうの会」の女性グループがサポートしてくれました。毎日数名のメンバーが交代で被災地を回ってくれました。当初、メンバーの方は「女性で高齢だし、力仕事もできないし、でも何か被災地のためにお手伝いしたい」と思いながら、なかなか現地に行くことはできずにいました。そんな中、地元のNPO団体のご紹介で手芸の得意なメンバーがいると、まけないぞうづくりに参加してもらったのです。全国から届くタオルの仕分けや材料の準備からすべてにお手伝いしてもらいました。地元の方と現地と一緒にいくことで、私にとっては方言が難しい岩手弁や土地の文化などを学びながら訪問することができました。メンバーのみなさんも沿岸の被災状況を肌で感じる事が大切なお手伝いをさせてもらったと話してくれました。

避難所では、家も流され何もすることがないという人



▲ふきのとうの会

が多くいました。まけないぞうの作り方を教えたあと、みんなが作っている輪の中に入らない女性がありました。「何故だろう？」と思いながら、様子をみていましたが、その後時間が経って、仮設に入居した頃、その女性が話してくれました。「あの時ね、“まけないぞう”に救われたんだよ。実はね、津波で孫を亡くしたんだ。見つかったんだけど、火事で真っ黒こげになっていた。最後に抱きしめたかったんだけど、それもかなわなかった。そのことを報道の人が取材しにきたんだけど、最初のうちは話

していたけど、途中から嫌になって…。避難所においても、家をなくした人、家族を亡くした人、それぞれ違うから話すこともなくなった。だからぞうさんを夢中になって縫った。縫っていれば誰も話しかけてこない。人と話さなくてすんだんだよ。だから、“まけないぞう”があつてほんと助かったんだよ。」と話してくれました。まけないぞうは、人と人をつなぐコミュニティづくりのきっかけにもなっているのですが、彼女の場合は一人になることを望んで、そのきっかけとなったのです。そんなふうにはまけないぞうが役に立っていたとは、いままでにないことで、ただただ目からうろこでした。



▲避難所でのまけないぞうづくり

避難所から仮設へ…

その後、約半年続いた避難所生活は仮設住宅での生活へと移っていきました。岩手県内では、最大1万4千戸のプレハブ仮設住宅が建設されました。全体では約5万3千戸の建設型仮設住宅が建設され、同時にいくつかの自治体では、地元の木材を利用した木造仮設住宅も建設されました。この他には、既存の公営住宅や雇用促進住宅を活用したみなし仮設住宅も約6万7千戸ありました。建設型仮設住宅は、もともと平地が少ないリアス式海岸のため、高台や内陸部などに点在していました。

その年の6月末に初めて陸前高田市の仮設住宅に訪問しました。集会所がなく仮設住宅の敷地内の隙間を見つけて、ボランティアセンターから持ち込んだ、テントと長机、パイプ椅子などを並べ、神戸大学の学生や一般のボランティアさんたちと連携しながら、お茶会やまけないぞうづくり、足湯などをしました。

まずは、仮設住宅を一軒、一軒訪問し、声掛けを行います。声掛けをすると少しずつみなさんテントに集まってくれます。みんなが集まりだすと「あー、あんた生ぎでだの？どごにいだの?」、「そうよ！この仮設の〇〇棟よ！」など、津波から3ヶ月が過ぎてやっと安否を確認できたのです。そんな会話をしながら、初めて会



▲仮設住宅での活動

う人もどこに住んでいたか、津波のときはどうだったかなど、話は尽きません。そして、大切な家族や親せきが亡くなった話など…。

ある日、「(仮設のお部屋に)声かけに行ったとき、なんだかとても辛そうで気になる人がいたから、お連れしました」と遠野の女性ボランティアが連れてきてくれた女性がいました。その女性は旦那さんを津波で亡くしたそうです。旦那さんと一緒に津波に流されて、女性は梁につかまり、旦那さんはそのまま波にのまれて、沈みゆく

〈避難所コラム〉



避難所では、26年前の阪神・淡路大震災時とほとんど変わらないような風景がそこにありました。コロナ禍のいま、やっと間仕切りやテントなどが設置され、プライバシーが確保され始めましたが、あくまでも「感染症」対策として広がったというのが現実だと思います。

当時避難所には、一部を除いて間仕切りや段ボールベッドはほとんどなく、阪神・淡路大震災から26年間、いやそれ以前の災害から変わることなく、被災者のみなさんは雑魚寝状態でした。食事は毎日コンビニのおにぎりやパンです。生野菜はありません。「コンビニの方には申し訳ないですが、もうコンビニのお弁当やおにぎりは当分食べたくないです。」という被災者がほとんどです。

日本の避難所の現状は海外に比べて、とても安全・安心できる場所ではないのです。こういった被災者の声を教訓として、もっと暮らしやすい避難所の環境改善をするべきです。被災者にとって“暮らしに仮はない”のですから。(増島智子)

手を見たそうです。その後必死にもがいて、陸を目指し、やっとの思いで浜に着いた途端に気を失い、気づいたときには病院のベッドの上だったそうです。それから退院し、仮設住宅へ入居し「なんで私だけ?? 仮設にいてぞうさんつくっているのだろう…」と。その言葉を聞いたときに、まけないぞうに出会ったということは、災害に遭ってしまったということ、みなさんの当たり前の生活が一瞬にしてなくなってしまったという現実が押し寄せ私自身もとても辛かったのです。

当時の作り手さんのメッセージ 2011年7月30日

 忘れもできない3月11日2時46分。今までにない長い地震、大きい津波、水に飲まれて流された一人です。主人は亡くなりました。助けられて生き、今は仮設生活です。ある日、お茶飲みに来てねと声をかけられて、行ったとき作ったピンク色のぞうさんです。とてもかわいい眼をしてリボンを付けていました。何十年ぶりに針を持って、先生に教えてもらいながら作りました。夢中になり、考えることなく作ったのが今のぞうさんです。一人生活でも作っている時は楽しいです。上手にはできないが、まけないぞうです。

 仮設住宅では、避難所で仲良くなった人もバラバラになり、また一からコミュニティを作らなければなりません。しかし、当初集会所がなかったために住民さんが集まって、交流することすらできずに、コミュニティを作ることができませんでした。仮に集会所があっても、「きっかけ」がないと出会ってつながることはできないのです。ボランティアが仮設に芝を植えて、あずまや風にしたり、花壇や野菜が植えられるようにして、そこでみなさんが立ち話や花や野菜を作りながら交流できる環境を整えていきました。その後、仮設に集会所ができてくると、全国各地からお茶会や小物づくり、炊き出し、花植え、物資配布などなど交流も増えてきて、コミュニティが形成されていきました。

今回多くの東日本大震災の被災地では各地に木造住宅が多数建設されたことで、その後の被災地でも木造の仮設住宅が増えて行きました。



▲木造仮設住宅

その後の仮設での暮らしは盛土による造成、高台への移転など大規模に土地を作ることから、インフラなどの復旧が当初計画よりも遅れに遅れ、10年間という仮設での生活がいまなお続いています。

再建へのみちのり・・・

その間に、まけないぞうの作り手さんも徐々に自宅を再建したり、復興住宅などへの引っ越しをしていきました。中には、津波から4回も5回も引っ越しをした人もいます。避難所から民間アパート、仮設、復興住宅、民間アパートなどと何度も引っ越しを余儀なくされた人もいます。

また、高台移転を希望した人の中には、何度も計画延長がなされた上に、予定地に水が出るということが発覚し、工期が伸びかなり落胆している人もいました。集団移転事業に参加しようとした人も、工期がかかりすぎるので市内の別の場所に移り住んだ人もいます。工期が遅れることが多くなり、被災者の人たちも何度も行われる説明会に嫌気がさし、「どうせ遅れるんだから」という声を聞くことが多くなりました。

同じ町内の人たちが数十軒の単位で、集団移転した人もいます。たくさん住宅が立ち並んでいるにも関わらず、いつも閑散として人の気配がしません。そこに入った人は誰にも会えなくて、仮設住宅の時のように集会所でお茶っこすることもなく、とても寂しいと言って、少し鬱のような状態になってしまった人もいます。



▲空き地や高台の造成地

高層の復興住宅に入居したまけないぞうの作り手さんは、これまで庭のある一軒屋に住んでいました。仮設でも軒先にたくさん花や野菜を植えてたりしていました。それが急にエレベーターがある高層住宅に移ったのです。ベランダも小さく、趣味だった花や野菜を植えることもできなくなってしまいました。エレベーターの乗り方もわからず、趣味だった園芸もできずに、家にこもるようになってしまったのです。それから体調がすぐれないことが続き、あまり積極的に外での交流会にも参加できなくなってしまいました。

住み慣れた町のはずでも、生活環境が変わっただけで、人は生きづらさを感じてしまうのです。それにいまはコロナが追い打ちをかけ、人々の交流を断絶します。阪神・淡路大震災の時に「孤独死」という悲しいことが多く発生しました。その原因は「孤独死の前に“孤独な生”があるということでした。いまもその言葉が心に残っています。東北や他の被災地でもこのこの“孤独な生”を生まないような取り組みがいまとても大切なように思えてなりません。



▲お茶っ子の様子



▲三陸道の工事

最後の仮設住宅が撤去され・・・

今年3月、10年目にして岩手県の陸前高田市の仮設住宅から最後の被災者が退去しました。岩手県には約1万4000戸建設され、3万1728人が暮らしていました。まさか10年も仮設住宅に暮らすとは誰が想像したのでしょうか。いまだに防潮堤の工事や道路の復旧は終わらずに、10年目にして初めてボランティアに参加したKさんは「まだ、工事してるんだね」と驚きを隠せませんでした。

海にはコンクリートジャングルのような防潮堤、山間部には延々と続く復興道路があります。人口的に作られた造成地の町は真新しい家々が立ち並ぶ一方で、無機質で住民さんとすれ違うこともほとんどなく、空き地が広がっています。どの地域も人口が震災前より減少しています。

作り手さんからはこんな言葉が

「こんなに大きな建物作って、一体だれが維持費を払うんだらうね…」

「こんなはずじゃなかった…」

(以前住んでいた町の写真をみて)「どこだかわからない。淋しい…」

「海が見えない…」

「いくら防潮堤があったって、津波は超えてくるよ…」

想像を超える苦難を乗り越え、いまを生き続けている被災者のみなさん。10年という年月はとて一言では語れないし、「10年の節目」とよく言われるますが、被災した人にとって節目でもなんでもありません。一日一日生かされたいのちを懸命に生きてくこと、ただそれだけなのです。

まけないぞうを通して出会った被災者のみなさん。それぞれに辛く苦しい津波の経験。あまりにも辛い現実に

〈建設型仮設住宅コラム〉

当時の被災地では、甚大な被害により仮設住宅の建設戸数が多く、寒冷地仕様の仮設が不足していました。そのため寒冷地にも対応できるように、断熱材や床下の喚起、追い炊き機能つき給湯器などを追加していました。さらにスロープや風除室、アスファルト舗装などの追加工事も多くありました。仮設の建設用地の中には、畑だった場所もあり、湿気が酷く、窓際のジュータンがカビで黒ずんだり、トイレの天井までもカビに覆われる住宅がありました。厳しい寒さゆえの結露も酷く、毎朝の拭き掃除は大変でした。私も遠野市の木造仮設住宅と陸前高田市の戸建ての木造仮設住宅と建設型プレハブ仮設住宅を借りていた時期もありますが、木造住宅の方が断然居心地がよかったです。木の香りが心地よく、棚を付け加えたり、鉄板の壁よりも結露も軽減されるなどメリットが多かったです。どうしても、プレハブ住宅は木造住宅に比べてコストが高くなり、環境への負荷も大きいのです。山林保持のためにも、間伐材や木材を有効利用することは環境への負荷を軽減し、地場産材の活用や地元の雇用を創出でき、地域経済の活性化にもつながっています。プレハブ型仮設は約600万円以上の費用がかかりましたが、木造型仮設は約250万円（岩手県住田町）ですみ、地場産材や建設業者など地元にお金を流す仕組みも整いました。使用後は、住民に払い下げして、最後まで有効利用をしたのです。まけないぞうの作り手さんの中にはこの払い下げた仮設を作業小屋にして、まけないぞうづくりや手芸作りをしたり、近隣のコミュニティをつくる空間として活用していました。(増島智子)





▲教訓を記した石碑

私自身も何度もこれが夢であってほしいと、何度も泣きながら車のハンドルを握り被災地に通いました。いまだに時折夢であってほしいそんなことを思います。被災者のみなさんにずっと寄り添い続け、励まし続けてきたまけないぞう。被災者だけではなく、私自身も支えられ、まけないぞうを応援してくださるみなさんも支え、支えられてきたと思います。復興は何を持って復興かなんてわかりません。きっとずっと続くものなのかもしれません。

いままでも、そしてこれからもまけないぞうはできる限りみなさんに寄り添っていきます。作り手さんのお一人が「まけないぞうはこれからも来てくれるものね。」と言ってくれた言葉がずしりと胸に響きます。



▲竹灯籠でつくられた3.11の文字



▲まけないぞうの作り手さん

〈くらし再建についてのコラム〉

「創造的復興」という言葉をよく耳にします。この言葉は阪神・淡路大震災の時に、当時の貝原県知事が「単に震災前の状態に戻すのではなく、21世紀にふさわしい復興を成し遂げる」というものでした。しかし、今回の東日本大震災でも「創造的復興」という言葉を旗頭に復興が進められてきました。東日本大震災で作られた復興基本法の理念には「単なる災害復旧にとどまらない一人一人の人間が豊かな人生を送ることができるようにすることを旨として行われる復興」と掲げていますが、その中身はどうでしょう。ハードの復旧面に偏重し、巨大堤防やイン



フラ設備など震災以前より市町村の負担は重くのしかかり、そこに加えて、沿岸では人口減少が激しく自治体は頭を抱えています。また、なりわい再生のためのグループ補助金では、身の丈以上の投資をしたり、震災後にうまく展望が開けずに倒産する会社も相次ぎました。この10年で福島を除いて、ほぼインフラが終了し、これからが本当の意味でのくらしの再建がスタートするのです。復興基本法には「被災地域の住民の意向が尊重され、あわせて女性、子ども、障害者等を含めた多様な国民の意見が反映されるべきこと」も基本理念に謳っています。

国も地方自治体もこの10年を検証し、今後のくらし再建にむけた道筋を被災地の声に真摯に耳を傾けながら歩み、真に成熟した社会を目指してほしい。そして、このことを次の被災地へも教訓として伝えてほしい。(増島智子)

POSKO 支援第2弾にご協力を！！

本「じゃりみち」NO.119号で特集を組んだ POSKO 支援の第2弾がスタートしています。この第二弾に対するご支援は、全国のみなさまと生活協同組合コープこうべからのご支援によって実施しています。

少し復習になりますが、POSKO というのはインドネシアで災害後に現れる募金受付や救援物資の集配所、避難所などの支援拠点のことです。昨年の7月豪雨後から被災地熊本県の被災地を訪問していて、筆者が出会ってきた「日本版 POSKO」が目に入り、少しばかりの財政支援とお米をはじめとした救援物資を届けてきたことに始まります。インドネシアの POSKO は自然に発生し、また自然に消滅します。ところが「日本版 POSKO」と称している熊本の被災地の場合、自然に発生するのは同じですが、発災直後から支援活動をしてきた下記の表に記載している3団体、1個人は9ヶ月を前にしても未だ支援活動を継続しており消滅していません。(詳細は下記の表を参照)

しかも救援物資の配布にとどまらず、心のケアや暮らし再建、コミュニティ再生を意識した活動に変化し、支援を継続していることが「日本版」たる所以なのです。ただ「球磨村渡地区大原伸司さん」の場合は、球磨村渡(峯・島田)地区の区長をされていることもあって、主に現在は仮設住宅でおひとり暮らしの被災者宅を訪問しています。区長さんによる訪問に、被災者は安心して訪問を歓迎されます。つまり、こうして訪ねて来てくれることが心のケアになっていると言えるでしょう。(詳細は当 NGO が配信している「2020年7月豪雨水害に関する支援ニュース NO.123 報を参照)

今回の災害はコロナ下における「複合災害」となり、コロナの感染防止のため熊本県外(後九州以外)のボランティアの支援に対して事実上の自粛アナウンスが流れました。豪雨災害で家屋に土砂が入り、生活用品が水に浸かり、多くの住まいが全壊・大規模半壊・半壊という悲惨な被害となりました。その上で夏は猛暑との闘いとなり想像を絶するほどの過酷な状況でした。通常ならボランティアが応援に来てくれるのが、先述したようにコロナとの複合災害のために、ボランティアはほとんど来なかったという事態になったのです。従って被災者自身が泥かき、清掃、住まいの乾燥と全てを行わなければならない事態となりました。

ただ、考えて見ればいつの時も災害直後は当事者はじめそこにいる人たちで、第一次的な助け合い活動をせざるを得ないので。というのは特に大規模災害となれば、複合災害でなくてもほんとうに大変な被災地からは「SOS」を出しても声は届かないことが多いのです。

でも直後のこうした体験は、その後のコミュニティの力を強固にし、復興という段階に入っても力を発揮することが期待されます。他方仮設住宅では、災害前のコミュニティがバラバラになり、その上、元の住まいに戻れるかどうかははっきりしない現状では、コミュニティ再建からは取り残される不安が募り、こうしたストレスで今後の健康状態に懸念が深まるのです。

この POSKO 支援第二弾の団体は、復興の“てまえ”まで被災者と共に歩む活動を続けるでしょう。是非、今後とも POSKO 支援にご協力をお願いします。(村井雅清)

< POSKO 第二弾一覧表 (2021年3月22日作成) >

	団体名	活動拠点	活動内容
1	球磨村雲泉寺災害ボランティアグループ	球磨村渡地区雲泉寺	救援物資提供、住まい相談、被災写真洗浄、家屋清掃からリフォームの手伝い、人吉球磨地区の被災者のメンタルヘルスケアを目的に、運動の提供。(参加者から・よく眠れるようになった・気持ちが明るくなったとの声) (*みなさまからご提供頂いたお米も配布して頂いています。)
2	球磨村復興協力隊	球磨村神瀬地区	避難所サポート、子どもの学習支援と遊び場提供、炊き出し支援(神瀬みんなでごはんプロジェクト)、村営住宅を使つての「アート・プロジェクト」(2月20日終了)、村営住宅解体後アートプロジェクトの第2弾を企画、被災者の仕事づくり(竹のスピーカーづくり)など。(*お米の配布は上に同じ)
3	個庫茶屋メンバー	人吉市	救援物資支援から一部ものづくり工房へ転換、家屋の片付けからリフォームまで(2軒)、被災者と支援者が集うカフェづくり、人吉市内の石蔵を使用したリヤカーマルシェ、パン工場づくり(障害者の仕事場にも)など、平時における普段着の助け合いによるコミュニティ形成を目指す。 (*お米の配布は上に同じ)
4	球磨村渡(峯・島田)地区 大原伸司	球磨村渡地区	主に仮設住宅入居者への見守り(特におひとり暮らしの世代)、救援物資支援、地区での自主防災活動、球磨村への復興計画提言活動など(*お米の配布は上に同じ)



新型コロナウイルス感染症の支援に ご協力をお願いします。 ~CODE は世界と日本をつなぎます~

新型コロナウイルスは、世界的な感染の広がりをみせています。CODEは、被災地支援の経験とネットワークを最大限に活用し、国際アライアンスを立ちあげ、世界各地の経験や取り組みを共有・発信しています。支援から取りこぼされていく「最後の一人まで」を大切にしていきます。ご支援・ご協力よろしくお願い致します。

■現在の取り組み

- ・国際アライアンスで世界の仲間たちとコロナ危機に対する取り組みや経験を共有し、共に解決の道を探していきます。(日本でのボランティアなどの取り組みを教えてください。世界へ発信します。)
- International Alliance for COVID-19 Community Response HP:<http://www.iaccr2020.net/>
- ・海外のカウンターパートを通じて途上国の厳しい状況の人たちを支えます。
- ・コロナで困窮している日本の若者たちを支え、応援します。
- ・最前線で戦う医療従事者を支えます。

ご寄付の方法

■ 銀行振込

ゆうちょ銀行

支店名：〇九九店
(ゼロキュウキュウ)
支店番号：099
口座番号：0330579 (当座)
口座名義：CODE

近畿労働金庫

支店名：神戸支店
支店番号：642
口座番号：8881040 (普通)
口座名義：CODE海外災害
援助市民センター

■ 郵便振替

口座記号番号：00930-0-330579
加入者名：CODE

■ クレジットカード

CODEのHPよりご寄付いただけます
<http://www.code-jp.org/cooperation/index.html>



■事務局ボランティアも募集しています！

私たちと一緒に活動して下さるボランティアさんを随時募集しています！初心者の方も全く問題ありません。ボランティアでの活動を通して、NGOや市民社会、防災・減災のことも学ぶことが出来ます。やる気のある方大歓迎です。ぜひお越しください。



当センターの姉妹団体「CODE 海外災害援助市民センター」の活動にもご協力よろしくお願いします。

■編集後記

まずは皆様にお詫びがございます。前の号は118号と印刷しておりましたが、本当は119号の誤りでした。そのため、本号は120号となります。申し訳ございません。

さて、新年度を迎え春の陽気の今日このごろ、皆様はいかがお過ごしでしょうか？私は花粉症なので目が痒くなったり、鼻水が出たりと日々悪戦苦闘しております。去年は花粉の飛散量が少なかったそうですが、今年は昨年と比べると増加傾向だそうです。場所によっては、去年の2倍の飛散量になるところもあるようです(でも平年よりは少ないそうです)。皆様の中にも同じように花粉症で大変な方も多いと思いますが、対策はされていますでしょうか？

昨今は、再び新型コロナウイルスの感染が拡大してきていますが、実は花粉症の影響で、目をかいたり花を噛んだりすることで、新型コロナウイルスに感染しやすくなる場合もあるそうですから要注意ですね。

(頼政良太)

■入金・カンパのお願い

被災地 NGO 協働センターでは、会員を随時募集しています。普段なかなか活動にご参加できない方でも賛助会員等で活動に間接的にご参加いただくことが出来ます。活動カンパ、事務局カンパも随時受け付けています。下記の振込先によりしくお願い致します。

- ★団体会員 年会費 ¥ 10,000 × 1口以上
- ★個人会員 年会費 ¥ 3,000 × 1口以上
- ☆団体賛助会員 年会費 ¥ 10,000 × 1口以上
- ☆個人賛助会員 年会費 ¥ 3,000 × 1口以上
- ☆自由選択会員 年会費 ¥ 任意の額

■郵便振替 加入者名：被災地 NGO 協働センター
口座番号：01180-6-68556

■ゆうちょ銀行

支店番号：一一九 (イチイチキュウ) 支店/店番：119
当座 0068556 / 受取人名：ヒサイチ NGO キョウドウセンター

■クレジットカードでのご寄付

クレジットカードでも会費やご寄付をしていただくことができます。下記 URL もしくは右の QR コードからお願いします。

<https://congrant.com/project/ngokobe/605>

